宿場町
ひらかた

第９６号

発　行
宿場町枚方を考える会
会長　上谷 勝己
枚方市船橋本町2-87-7
072-857-2995
編 集 広報委員会

会員のための
知っとく交流会を開催

本会は再来年設立40周年を迎えます。しかし、会員数の減少、高齢化などにより、様々な課題を抱えています。今回、本会の活性化に向け、会員限定の参加型勉強会を兼ねた「知っとく交流会」を開催しました。会員同士が互いに勉強し、交流するのが目的です。

第１回目は９月11日に枚方中央集会所で開催しました。参加者は22人、上谷会長が講師となり、「東海道57次大津から守口までの四宿」と題し、基礎的知識を学びました。

引き続き交流会を実施、出席者から新規会員を募る方法、自分が入会した経緯・思い、今後の事業など、多くの意見をいただきました。

上谷会長

第２回目は９月25日、場所は同じ枚方中央集会所、参加者21人で実施しました。標題は、四宿も舞台となった『鳥羽・伏見の戦い』を数字で見る」で、講師も同じく上谷会長が務めました。

交流会も活発で、数々の質問や提案があり、有意義な時間となり、会員同士の交流が図れたと思っています。

今後も会員参加の場を設け、学び合い、交流を深めていく考えであり、会員の積極的な参加をお待ちしています。

交流会

主な内容

○ 知っとく交流会を開催（１頁）
○ いましろ大王の杜を訪ねる（２頁～７頁）
○ 大坂の陣から太平の世へ（８頁～12頁）

近郊の史跡を歩く会

いましろ大王の杜を訪ねる

三栗　石川　勲

令和5年春の「近郊の史跡を歩く会」は5月21日、高槻市にある今城塚古墳、隣接する今城塚古代歴史館を訪ねました。今城塚古墳は歴史公園として整備されており、今城塚古代歴史館とセットで「高槻市立いましろ大王の杜（もり）」と呼ばれています。約8500㎡あり、古墳は昭和33年に国の史跡に指定されています。歴史遺跡でありながら緑豊かな市民の公園で、本会としては平成25年以来の訪問です。

会員など33人が枚方市駅北口から京阪バスでJR高槻駅へ、そこから高槻市営バスの奈佐原行に乗り換え、今塚古墳前で下車、今城塚古代歴史館のボランティアガイドさん3人のお迎えを受けました。

まず、今城塚古代歴史館の玄関横に集合、上谷会長のあいさつに続き、ガイドさんから見学の要領など説明があり、3班編成に分かれて出発しました。

最初に案内されたのは今城塚古代歴史館の背後にある「はにわバルコニー」です。トイレの上ですが、展望台になっています。ここから古墳の全景と、手前の公園部分が一望でき、説明板と対比しながらガイドさんの説明を受けました。

「はにわバルコニー」から降りると、地上にタイルでモ

ザイク模様に描かれた三島の古代地図があり、当時の古墳群などの位置関係が示されていました。その横には古墳の全体模型がありました。

古代地図

古墳全体模型

模型を見ると、今城塚古墳が典型的な前方後円墳だとわかります。

埴輪祭祀場

さらに前方には、といっても古墳本体の手前ですが、東西65ｍ、南北６ｍの広さの埴輪祭祀場（埴輪まつりのステージ）があります。

長いため一部です

平成13～14年度の発掘調査で北側内堤から、家形、力士形、武人形、巫女形、馬形、鶏形など１００点をはるかに超える象形埴輪や埴輪祭祀区（はにわさいしく）が出土しました。

家形

武人形

葬送儀礼を再現したものとされ、被葬者の権威を示すものだといわれています。古墳が完成してから後付けされたと考えられています。

馬形

巫女形

古墳内堤の発掘位置に埴輪祭祀場として再現され、１９０点以上の象形埴輪が並んでいます。公園最大の特徴となっており、高槻市のHPではハニワ祭が再現されているの

は日本でここだけとなっています。展示されている埴輪は精巧な複製品ですが、実物は後述の今城塚古代歴史館で見ることができます。

これらの埴輪は「太田茶臼山古墳（後述）」の埴輪製作のために設置された新池埴輪窯（新池遺跡）で造られたものです。今城塚古墳から西北西1．5㎞にあり、高槻市がハニワ工場公園として整備し、公開しています。

今城塚古墳の規模

今城塚古墳は、枚方大橋から直線で北西5㎞余りの位置にあります。古墳時代の後期6世紀前半に築造された前方後円墳です。淀川流域では最大で、墳丘長180m、二重の濠を含めると全長は350m、幅340mあります。

被葬者は、古墳の形状、埴輪の特徴などから6世紀のヤマト政権の大王墓と推定され、日本書紀が531年没とする継体天皇（第26代）とするのが学会の定説です。高槻市発行のパンフには「継体大王の真の陵墓といわれる今城塚古墳」と記されています。

太田茶臼山古墳

宮内庁が継体天皇陵として治定（じじょう／陵墓の被葬者を特定すること）しているのは「太田茶臼山古墳（おおだちゃうすやまこふん）」です。三嶋藍野陵（みしまのあいのみささぎ）と呼ばれており、拝所も設置されています。

今城塚古墳からは西へ直線で1．3㎞、茨木市にあります。出土埴輪などから5世紀中頃の築造と推定され、継体天皇の没年と合わないため、今城塚古墳が真の継体陵とするのが有力視されています。

今城塚古墳内へ

埴輪祭祀場の説明を終えたボランティアガイドさんは、私たちを古墳中心部の墳丘に案内してくれました。

天皇陵と治定されていないため、今城塚古墳は一般人でも自由に立ち入ることができます。高槻市観光協会のHPでは、「天皇陵（大王墓）でありながら古墳の中を自由に歩きまわれる公園は“日本でここだけ”」「自然豊かな市民の憩いのスポット」とPRしています。

芝生広場から墳丘への出入口は何カ所あり、班により巡る順序は異なりますが、ポイントを紹介します。

墳丘盛土を雨水からまもる工夫

後円部の中心部にあります。説明板によると、2段目の盛土内から、中心部を取り巻く

ように河原石を積み上げた大きな石組、さらに何本もの排水溝を設け、内部に浸透した雨水を排出する施設が見つかりました。これにより墳丘のゆるみや崩落を防ぐ工夫がされています。

重い石室を支えた石組

次のポイントも後円部の中心部にあります。ただし、この石組は平成19年に後円部北側の崖下で発見されました。

文禄5年（1596年）の慶長伏見地震で盛土ごと滑り落ちた状態で出土したのです。

2段目の盛土の中央上部に埋め込まれたコの字形の石が3段に積まれており、横穴式石室と見られ、規模から3つ以上の石棺が収められと推定されています。石室の重量は100トン、この重い石室が不等沈下しないように築かれた人工地盤の石組があった場所です。古墳から1㎞東を流れる芥川の河原石が使用されたとされています。

モニュメント

後円部の端にあります。写真では見にくいですが、数字が書いてあります。531は継体天皇が没した年、2011は「いましろ大王の杜」が整備完成した年です。白いクロスは石室の中央を示しているとのことです。

今城塚古代歴史館

墳丘内の見学が終わると、ガイドさんは今城塚古代歴史館に案内してくれました。鉄筋コンクリート造り2階建てで、延床面積は3956㎡あります。

同館は平成16年（2004年）から整備されてきた今城塚古墳の発掘調査の結果や歴史文化を体験できる博物館として平成23年（2011年）4月に開館しました。三島古墳群の概要を始め、発掘された象形埴輪、3基の復元石棺、ジオラマや映像により今城塚古墳を紹介しています。

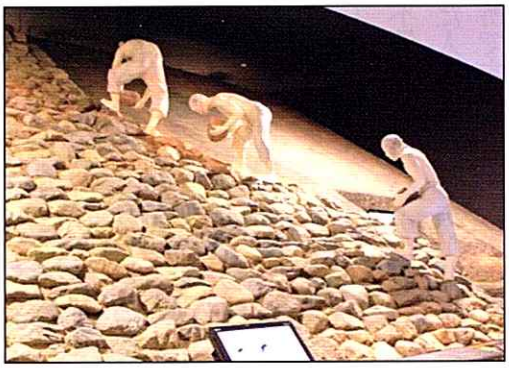
巨大スクリーン

常設展示室を入ると、三島の古墳時代前史を説明する巨

大なスクリーンがあり、映像で旧石器時代から弥生時代を経て王の登場までを解説しています。

石積み

次に目に留まったのは、古墳後円部表面の石積みをしている等身大の人形です。よく見ると、上部は小さい石、下部は大きな石を積んでいます。重機のない時代、人が一個ずつ運び積むのは大変な作業だったと思います。



出土埴輪

既述の埴輪祭祀場に展示されている象形埴輪はレプリカですが、館内に展示されている埴輪は実際に出土したものです。そのため修復痕のあるものも展示されています。

なお、館内では体験学習の一環として「埴輪づくり教室」を開催しています。毎月ではありませんが、子どもさんでも参加することができます。

石　棺

レプリカですが、館内には３つの石棺があります。後円部の発掘調査では石棺の破片が多数出土しました。３つの石棺というのは、３種類の石片があったためです。兵庫県高砂市で産出される竜山石、大阪府と奈良県境の二上山白石、熊本県宇土市の阿蘇ピンク石(阿蘇山の火山灰)です。こうした石棺の石材調達だけでも相当な資材と労働力が必要です。被葬者である大王の権力がいかに絶大だったかを知ることができます。

これまで発掘されていた石棺の破片は、最大のものでも20㎝でした。その後、平成28年に長さ１１０㎝、幅66㎝、厚さ25㎝の阿蘇ピンク石が

見つかりました。近くの石橋に転用されていた石材でした。

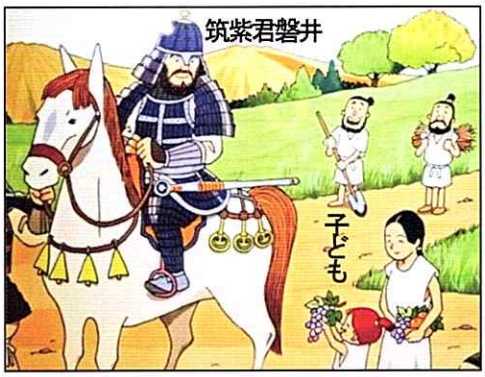
筑紫君磐井

本会は6月18日、森田克行氏（今城塚古代歴史館前特別館長）を招いて歴史講演会を開催しました。

氏は講演の中で、継体天皇が樟葉宮で即位してから20年近く、淀川水系で遷都していたのは、北部九州を支配していた筑紫君磐井（つくしのきみいわい）に対峙するためと述べられておられました。

筑紫君磐井は、大和朝廷が百済と、磐井が新羅という外交上の相違の側面もあり、継体天皇21年（527年）に「磐井の乱」を起こします。結果的には翌年、物部麁鹿火が率いる朝廷軍により鎮圧されます。私は昨年の10月、継体天皇にとっては政敵、つまり朝敵だった筑紫君磐井の岩戸山古墳（国史跡／福岡県八女市）を訪ねていました。

朝敵だった筑紫君磐井、でも当地では英雄です。岩戸山古墳に隣接する岩戸山歴史文化交流館の玄関前には立派な胸像があり、館内に展示された「（自称）花を差し出す子ども」の絵からは、筑紫君磐井が領民に慕われている様子を感じました。



大坂の陣から 太平の世へ

交野市　堀家 啓男

家康 幕府を開く

慶長５年（１６００年）、関ヶ原の勝利で政権を掌握した徳川家康は、３年後の同８年（１６０３年）、征夷大将軍の宣下を受け、江戸に幕府を開きました。その２年後、同10年には将軍職を嗣子秀忠に譲り、徳川家による将軍職の世襲を天下に明らかにしました。自らは大御所となり駿府に城を築き、政権運営を行います。六十五万七千石と大幅減封になった豊臣家に対しては、秀吉の子秀頼が成人しても政権を返還する意思のないことを示しました。

しかし、家康にとって、豊臣家が大坂城に存在していることは、のどに刺さった魚の骨のように気がかりで、徳川政権安泰のためには、何としても除去したい思いがありました。まず、豊臣家の財力を消耗させるため、社寺の修復、造営を勧めます。一方、豊臣家も家運の挽回を祈願し、社寺の修復、造営を盛んに行いました。

大坂城から見て北東に当たる交野ケ原では、大坂城の鬼門除け鎮護のため、坂村の片埜神社や船橋村の二ノ宮神社が壮麗に再建されました。いずれも秀頼の意向によるもので、片桐且元在判の棟札が残っています。

家康の言いがかり

慶長19年（１６１４年）８月、豊臣家が予定していた京都、方広寺大仏殿再建の開眼、供養の直前、鋳造した同寺鐘銘の「国家安康　君臣豊楽」の８文字は、家康の諱を分け、呪詛し、豊臣家を君とし末永く楽しむもので、「徳川家に不

吉である」と言掛りをつけ、式を延期させます。造営奉行、片桐且元が釈明のため駿府に出向きますが、家康との面会もできず、金地院崇伝らから、秀頼が大坂城を退去し、転封するなど、三カ条の難題を出されます。

大坂に帰った且元は、秀頼らを説得します。且元は、そもそも秀吉子飼いの忠実な武将でしたが、秀頼は且元が徳川に寝返ったとし、解任、禄を奪い出家を命じました。たまらず10月1日、且元は大坂城玉造門を出て、徳川家へ走りました。いよいよ大坂城は戦闘準備態勢に入りました。同日、家康は開戦を決意、大動員令を発しました。

家康は10月11日、鷹狩姿で親衛隊とともに駿府城を出馬、12日には掛川城で板倉勝重の報告に接します。長宗我部盛親、後藤又兵衛、真田幸村ら、名だたる武将が大坂城に入城、牢人ら兵力十二万～十三万、沸き立っているとのことでした。

徳川諸将 枚方駐屯

慶長19年（1615年）10月19日、徳川方先発の本多忠政（伊勢桑名城主）が伊勢の諸将を率い、伏見から河内、枚方に進出し、松平忠明（伊勢亀山城主）は、美濃の諸将を率い、淀を経て枚方に布陣しました。まだ枚方宿はありませんので、三矢あたりの「町屋」を利用し、兵糧を準備し、駐屯したのでしょう。

10月23日、家康は京に到着、二条城に入ります。同日、将軍秀忠が十数万の兵を率いて江戸を出発しました。

10月29日、大坂方が出口の淀川堤を切ります。出水で京街道の交通を遮断し、大坂城下を浸水させ、徳川方の攻城を妨害する作戦です。この作戦は最近注目されており、真田幸村の出城、真田丸との関連性が指摘され、作戦が成功していれば洪水で徳川方を大いに困らせたでしょう。

しかし、作戦は、枚方に駐屯していた美濃岩村の松平乗壽（のりなが）ら美濃勢が出動して、直ちに堤を修復したため失敗しました。

大坂方は11月2日にも、守口佐太で破堤を試みますが、同じく美濃勢の活躍で撃退されました。このときの鉄砲戦が両軍最初の戦闘でした。枚方に駐屯した徳川勢が活躍したのです。

11月11日、家康のいる二条城に秀忠が入り、主力がそろいます。15日、家康は二条城を出陣、奈良に向かいます。同日、秀忠が伏見城を出陣、枚方に進み、二方面からの進軍です。

16日、家康は法隆寺に泊まり、秀忠は大坂の岡山に着きます。17日、家康は住吉、秀忠は平野に布陣します。11月18日、秀忠は天王寺の西南、茶臼山に布陣、訪れた家康と軍議を重ね、茶臼山を本陣と決めました。徳川方による大坂城包囲の完了です。

……迫る大坂、冬の陣……

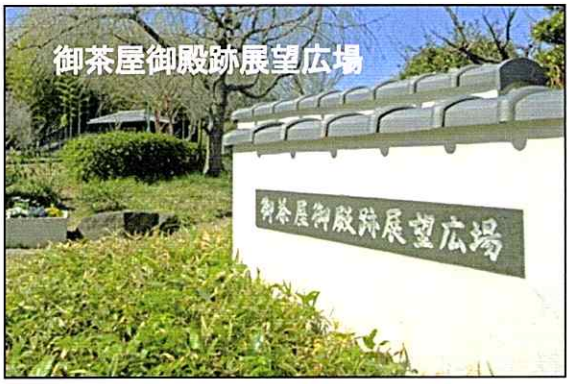
枚方城はあった？

これまでの経緯に、「枚方城」の名前は出てきません。大坂の陣の時、「枚方城」があったのか、それともなかったのか。

ある書物に、「枚方城」が枚方小学校付近（枚方上之町）

にあり、秀吉の重臣、本多内膳正政康の居城でしたが、大坂城の落城に伴い、廃城になり、本多氏も滅んだという記述があります。

また、秀吉が政康の娘（乙御前）を寵愛し、御茶屋御殿（秀吉が建てた休憩施設、枚方元町の万年寺山上にあった）に住まわせたといわれています。



また、岡南町の一乗寺には「夏の陣」の後、死去した政康の墓石があり、政康、乙御前の伝承が残っています。

枚方市市史資料調査専門員だった馬部隆弘氏（ばべ　たかひろ　現在、中京大学教授）が、ある講演会（２００７．３．25）において次のように語られていました。

①枚方小学校あたりに織豊系城郭が存在した特徴は皆無②枚方は豊臣家の直轄地で大名が配置されたことはない③「政康」「乙御前」はいずれも「一乗寺」の記録にしか出てこない④一乗寺の政康の墓石はどう見ても、江戸時代の中、後期の造りとして…、政康や枚方城の存在を疑問視する意見を提起されています。

「冬の陣」の徳川方の動きを見ると、枚方は駐屯か、通過で、駐屯する枚方から出撃し、帰還することはあっても、枚方での攻城戦の記録はありません。筆者は枚方小学校の出身ですが、当時、学校周辺で城の痕跡となる瓦や石垣の欠片一つ見たことがありません。もし城の歴史があるなら、校長先生や担任の先生が話の一つでも聞かせてくれたでしょう。

昔、ため池（観音池、埋め立て後に住宅地）が崖下にあり、ひし（菱）の種子を採りましたが、周りに石積みなどの痕跡はなく、筆者も「枚方城は存在しない」との見解に賛同です。

大坂城は丸裸

「冬の陣」は、真田丸における真田幸村の奮戦のように、勇将が活躍し、両軍の優劣は拮抗していました。家康は、大坂城の難攻不落を思い知り、有利な和睦条件を考えます。まず強硬派の淀殿がいる大坂城の櫓に大砲を打ち込みました。何しろ淀殿や秀頼のいるところは、直前まで在城していた片桐且元が一番よく知っていたのです。命中した砲弾の威力と轟音に恐怖した淀殿が和睦に傾くと、交渉は急速に進みました。

本丸だけを残し、二の丸、

三の丸を「壊平」するという徳川方有利の条件の下、12月22日に和睦が成立します。翌23日、秀忠は、さっそく諸将を指揮し、総構（そうがまえ）の堀を埋め立て始めます。家康は「二の丸、三の丸の堀も埋めよ」と命じ、二条城に引き上げました。秀忠は塀も壊し始めます。大坂方が抗議しますが、徳川方は「壊平の範囲」と無視します。慶長20年1月19日、埋め立て工事は完了し、秀忠は伏見城に戻りました。月末には、哀れ大坂城は本丸だけの裸城になっていたのです。

……ああ悲惨、大坂城……

大坂 夏の陣

慶長20年（1615年）4月4日、和睦からわずか3カ月、家康は駿府を発ち、名古屋に向います。九男義直の婚儀に列席するとの理由でしたが、実態は大坂討滅への出馬でした。18日には二条城に到着しています。秀忠も同10日、大軍を率いて江戸を出馬し、21日には伏見城に入りました。4月24日、家康は大坂方に対し、大和郡山城への移転を要求します。これが最後通牒でした。大坂方が拒絶すると、徳川方は25日、一斉に行動を開始しました。総数十五万、対する大坂方の兵力はわずかに五万余でした。

5月5日、家康は二条城、秀忠は伏見城を出発し、家康は、河内、星田（交野市）に、秀忠は、より大坂に近い河内、砂（四條畷市）に布陣しました。藤堂高虎らの先鋒隊は、すでに大坂城周辺に進出していました。同7日払暁、大坂方の後藤隊出撃、真田隊も勇戦します。幸村は兵三千を持って、松平忠直の兵一万三千を撃破し、さらに家康の本陣を急襲し、旗本勢を蹂躙しました。このときのことを、槍奉行であった大久保彦左衛門は、家康の旗と槍までも敗走する味方に踏みつぶされ、家康のそばの侍は小栗忠左衛門一人であったと「三河物語」で述べています。

午後2時頃、徳川方は有り余る兵力で、態勢を立て直し反撃に転じます。さすがの猛将幸村も安居天神（神社）付近で討死、諸将も激戦の末、撤収しました。午後5時頃、大坂城は紅蓮の炎に包まれました。

京都にいる公家の一人は、御所の屋根に上がり、夜半までその火炎を見物したと日記に記しています。炎は京都にまで見えていたのです。大坂城はそのまま燃え続け、8日、灰燼に帰した正午頃、秀頼、淀殿母子は炎の中で自害し、豊臣家は二代で滅びました。秀頼23歳、淀殿49歳でした。これが「元和偃武」、武器を納め、太平が訪れる、江戸の世の到来でした。

神祖営趾之碑

JR星田駅から東へ徒歩約20分に、交野市星田に市指定の文化財「神祖営趾之碑（星田2丁目）があります。江戸後期の文化3年（1806年）、星田村の領主市橋長昭（仁正寺藩主、一万八千石、近江蒲生郡他。秀吉時代に先祖長勝が星田村で千三百石を拝領）が、星田村の庄屋、平井氏とともに建立、市橋自身が撰文を書いています。題額は星田

村相給の小田原藩主、大久保忠眞の書です。

現在は駐車場の奥にありますが、実に立派な碑です。風化して判読が難しくなっていますが、おおよそ次のような内容です。

「大坂、夏の陣に際し、神君は、先祖長勝に対し、星田の里甲（村長）平井清貞宅に宿営の設定を命じ、5月5日、大篭入営、翌6日、出撃した。このことは領主としての誇りである。長勝は関ヶ原をはじめ「大坂の陣」でも勲功を上げ、四万千三百石をいただいた。その忠節は誇らしい。自身長昭は、大坂城の大番頭を務め、巡察のため、星田を訪問し神君行営の遺趾を見て、感動し、神祖の偉業と藩祖長勝の忠節を長く伝えるため碑を建立する。建立のため、良石を求め清貞七世の孫、貞豊が奔走した」。

星田村近世の歴史を語る貴重な碑です。丁寧な説明板があります。交野市は、家康、星田の本営出発のイベントを行うなど、ＮＨＫ「どうする家康」にあやかり、おもしろい取り組みをしています。

（参考、「枚方市史別巻」枚方市、「交野市文化財だより」交野市文化財事業団、１９９７．３．２８発行、「歴史と旅」昭和５８年、１９８３年６月号、「東海道枚方宿と淀川」中島三佳著、「星田と徳川家康公」西井長和著）

機関誌の文責について

本誌「宿場町ひらかた」の文章のうち、著者名のあるものは、投稿された原文をもとに編集しています。編集の都合上、少し原文と異なる部分もありますが、変更後も著者の確認を得ており、文責は寄稿者にあります。ご了承ください。

新会員紹介

堀　千代子さん　養父元町
半野田幸次郎さん　山之上西町
瀧本　茂利さん　楠葉丘
和田　進さん　牧野北町
松田　明恵さん　西田宮町

ホームページを開設しました

本会をよりご理解、ご賛同をいただくため、事業内容、入会案内などを掲載しています。

HP　https://syukubamachi-hirakata.com

宿場町枚方を考える会　検索してね！